

平成22年度アジア地震学会（ASC）渡航助成金成果報告書：ASC2010に参加して

京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻

修士1年 大谷真紀子

2010年11月8日から10日にかけて3日間、ベトナムのハノイで第8回アジア地震学会(ASC: Asia Seismological Commission)2010が開催されました。今回私はこの学会に参加し口頭発表を行ってきたので、ここでその成果報告を行います。今学会のテーマは「Mitigating seismic hazards and disasters in Asia アジアにおける地震災害・危険の軽減」で、実際に参加した人数はまだ公表されていませんが、主にアジアの32の国と地域より約300人が参加予定の学会でした。

今回の発表は私にとって初めての海外学会・初めての口頭発表で、英語に対する不安等もあって飛行機の中からすでに非常に緊張をしながらベトナムに向かいました。空港で車の迎えがなかなか見つからなかったり、ホテルでセーフティボックスが開かなくなってしまったりとトラブルもありましたが、英語は拙くともなんとか意思は通じるのかもしれないと、少しは楽観的な気持ちをもてた時でもありました。学会はハノイ中心地から車で30分ほどのVAST(Vietnam Academy of Science and Technology)という研究所で行われ、私はNature of Seismic Sources and Prediction of Earthquakesというセッションで「H-matricesを用いた大規模準動的地震発生サイクルシミュレーション」という内容で発表をさせていただきました。本研究は海溝型地震発生の連動性評価等のために近年行われている準動的地震発生サイクルシミュレーションに対してH-matricesとよばれる行列圧縮法を適用し、計算の高速化・省メモリ化をはかったものです。アジアではあまりなされていないのか、今学会では自身の研究内容に近い震源の数値計算についての発表はほとんどなく残念でしたが、発生予測に関してはseismic gapの位置に関する話が多く日本の学会ではあまり聞くことのできないアジア各地の地震事情を聴くことができたのは面白く思いました。発表に関しては、英語の問題以前に、12分という短い発表時間の中でわかりやすく伝えることの難しさはもちろんのことバックグラウンドが違う方々に向けて話すことの難しさを強く感じました。発表後の質疑応答の時間では、非常に単純なことを聞かれたのに何回も聞き返してしまい、今後英語に普段から慣れておこうと思いました。

今学会では、海外の方、特に開催地ベトナムの、会場となった研究所VASTの方々や学生たちと話をすることがたくさんありました。ベトナム英語と日本英語で、簡単な単語でも発音が違い意思疎通は非常に困難でしたが、同じく地震学に興味を持つ、違う国の同じような年代の方々と話をすることができたのは感慨深く、これから頑張っていこうと思うことができました。

海外渡航旅費を援助していただき、このような経験をすることができる機会を与えてくださったこと、最後になりましたが、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。